

## 秋田ではゼロから漁業者になれます

秋田県漁業協同組合 南部総括支所  
藤岡 亜津史

### 1. 地域の概要

秋田県にかほ市は、県南西部の、山形県との県境に位置する人口約2万1,000人の市である（図1）。北から平沢（ひらさわ）、金浦（このうら）、象潟（きさかた）および小砂川（こさがわ）の4つの漁港が存在し、底びき網漁業、小型定置網漁業および潜水漁業が盛んな漁業の町でもある。「市の魚」はマダラで、私が住んでいる金浦地区では、江戸時代から300年以上も続く「掛魚（かけよ）祭り」が毎年2月4日の立春に行われ、そこでは何十人もの漁業者らがマダラを担いで金浦山神社に奉納し、海上安全と豊漁を祈願している（写真1）。また、にかほ市のイワガキは、ミネラル豊富な鳥海山の伏流水で育つため、甘みが強く味が濃厚と有名である。

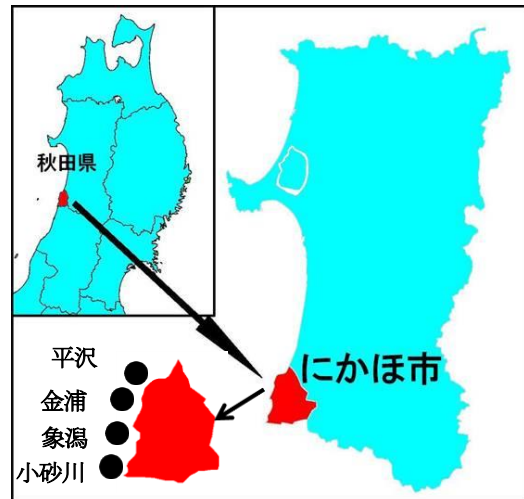


図1 にかほ市の位置



写真1 掛魚祭りの様子

### 2. 漁業の概要

秋田県漁業協同組合南部総括支所管内（以下、「漁協」とする。）の金浦地区には正組合員48人、准組合員4人が所属し、平成28年の漁獲量は約540トン、漁獲金額は約3億円である。漁業種類別漁獲量では、基幹漁業である底びき網漁業（一そうびき、かけまわし式）および小型定置網漁業で約9割を占める一方、夏はイワガキやアワビを対象とした潜水漁業が盛んで、特にアワビの漁獲金額は、県魚のハタハタに次ぐ2番目の額を占める。

### 3. 研究・実践活動の取組課題選定の動機

#### (1) 漁業者への第一歩に至るまで

私は親類に漁業関係者はいない。出身は岩手県と隣接する内陸の美郷町（みさとちょう）で、周りに海がない土地で暮らし、地元の工業高校を卒業した。海釣りには何度か行っていたが、海が好き、釣りが好きというだけで、漁業に興味はあるものの、何のつてもない自分が漁業者になれるとは思っていなかった。

そのような私に転機が訪れたのは、平成 28 年に開催された「秋田県漁業就業体験（以下、「漁業体験」とする）」のチラシを見つけたときである。漁業体験の内容・目的は、漁業に興味がある未経験者を対象に実際に体験してもらい、漁業者を増やすことを目的とする事業とある。漁業に憧れを抱いていた私は、体験を通してなら自分も漁業者になれるかもしれないと考え、早速、応募することとした。

後から知ったのだが、この漁業体験は秋田県が平成 28 年度に初めて開催した事業で、結果として、私がこの事業を通しての漁業就業者第 1 号となった。

#### (2) 漁業体験への参加

漁業体験は9月16日から18日にかけて、秋田県北部の八峰町（はっぽうちょう）で行われた。内容は、初日は自己紹介や魚の荷揚げおよび市場での競りの現場の見学であった。

2 日目は、海上で底びき網漁の様子を見学した。自分たちはとにかく船酔いをしないようにと気を張り詰めていた中、忙しそうに働いている漁業者とは、すごい人たちだなと思った。

3 日目は魚の捌き方などの講習の後、就業支援制度の説明等の講義を受け、漁業体験が終了した（写真2）。



写真2 就業体験による間近に見る漁業

#### (3) 漁業体験を終えて

漁業体験を終えて、やはり自分は漁業者になりたいと強く思うようになった。漁業体験では、県に相談することが近道との説明があったため、すぐに話を聞こうと県庁と水産振興センターを訪ねた。

面談では秋田県の漁業の実態などについて詳しい説明があり、私の希望も含めさまざま

なことについて相談した。県では「秋田の漁業担い手育成支援事業」という、漁業就業希望者がベテラン漁師から研修を受けることができる制度を勧められた。この研修を受けることとしたが、私からの希望として「乗組員としての研修」、「自分と年齢が近い、若い漁業者が多い地区での研修」の2つをお願いした。その結果、にかほ市管内で希望に沿った研修受け入れ先を探してくれることとなった。

その後、10月18日に漁協職員と、自分の指導者となってくれた漁業者の方（指導漁業士。以下、「親方」とする）と漁協で初めて会い、翌日には親方の底びき網漁船 第五栄徳丸に乗せてもらえることとなった。

#### 4. 研究・実践活動の状況及び成果

##### (1) 底びき網漁船の乗組員となって

私は10月19日に人生で初めて底びき網漁船に乗船することができた。集合時間は真夜中の午前1時だったため、前日の午後11時に内陸部の自宅を出発した。

親方からは「船上ではとにかく安全に注意し、隅でじっとしていること」との指示があった。しかし、漁場までの片道約2時間、また、その後の何時間にも及ぶ漁の間じっと船酔いに耐えていることは、何もしなくてもよいにもかかわらず私にとって非常に困難なことで、不本意ながら船に酔い3度ほどもどしてしまった。しかし、当日は天候が良かったことが幸いし、正午を過ぎた辺りからだいぶ船酔いも落ち着き始め、わずかだが選別の手伝いをすることができ、帰港後は車を運転して帰宅することができた。

その後は乗船するにつれ徐々に船酔いは軽くなっていき、魚の種類、箱詰めの方法、機器の操作方法、網の補修方法から賄いの作り方までを丁寧に指導してもらい、少しずつ仕事を手伝えるようになっていった（写真3）。11月中には金浦漁港近くのアパートへ引っ越し、12月から第五栄徳丸の乗組員として晴れて正式に雇用され、無事漁業者となることができた。



写真3 研修中の底びき網漁業

##### (2) その後の展開

その後も自分なりに懸命に仕事を覚え、また、掛魚祭り等地区の集まりにも参加するなど（写真1：左）地区の先輩漁業者の方々と積極的に交流できたこともあり、翌年4月に金浦地区の正組員になることができた。その後は一級小型船舶免許を取得し、船外機船も

購入し（壮洋丸、0.6 トン）、7 月から解禁となる潜水漁業もできることになった。なお、組合への出資金、船舶免許の取得費や船の購入資金など、漁業を始めた当初は何かとお金が必要であった。日頃からコツコツとお金を蓄えておいてよかったと改めて感じた。

潜水漁業については、海に潜ってアワビやイワガキを獲ること自体、私にとって初めての経験であったため、親方から指導を受けることとなった。7 月 6 日に練習として指導を受け、翌 7 日に初めて潜水漁業を行った（写真 4）。しかし、当日は波は穏やかだったものの水がとても濁っていて、私はアワビを獲るどころか見つけることすらできなかった。結局、私の潜水漁業のデビュー戦は 1 つもアワビを獲ることなく漁を終えるという、非常に悔しい結果となった（親方や先輩漁業者は普段どおり漁獲していた）。しかし、その 3 日後には、どうにか自分 1 人でアワビを制限個数まで獲れるようになった。

9 月からは再び第五栄徳丸に乗り、親方や関係者の温かい指導や助言もあり、漁業者として無事 2 年目を迎えることができ、現在に至っている。



写真 4 独り立ちを目指す潜水漁業

### (3) 苦労した点

私が一番苦労した点は、やはり船酔いである。漁業に興味を持っている全ての人が不安を感じていると思うが、残念なことに船酔いは誰でも必ずする。しかし、誰でも必ず慣れると信じ、漁業者になると誓ったときの初心を忘れず頑張り抜くしかないと思った。また、本当に辛い時に無理をして乗船すると、却って他の乗組員の方に迷惑を掛けることになる。そのため、普段の体調管理も仕事なのだという意識を強く持つようにした。

次に苦労した点は、生活のリズムが普通の生活とは大きく異なったということである。底びき網漁は早い時は夜中 1 時に出漁し、帰港は夕方 5 時を過ぎることもある。そのため、連続で出漁する場合は体力的に段々ときつくなってくる。いずれにしても、自分が漁業という仕事を選んだのだから、親方や先輩方と同様に克服していきたい。

### (4) 漁業の魅力

月並みな言い方かもしれないが、たくさん魚が獲れたときは胸が躍る。これは本当に漁業者になる前に抱いていたイメージのとおりだ。船の上で食べる魚は鮮度、味ともに格別で、どんなに高いお金を出しても食べることができないものである。また、自分たちが苦労して獲った魚をおいしく食べてもらえた時、良い値段が付いた時はやはりうれしく思う。

潜水漁業については、仕事だということを忘れてしまうくらい本当に楽しい。ダイビング

グと同じようなことを仕事にできるというのは、漁業者の特権とも言える。潜水漁業で初めて、自分の船名で漁獲物を出荷できた時は、今までの苦労が報われたかのような満足感を得ることができた。

## 5. 波及効果

南部地区には私の他にも研修制度を活用した方が多くおり、私自身が先人の新規就業者に続いた形になっている。特に底びき網および定置網では、ほぼ全ての船で研修生を受け入れていただいている。私にとっても、自分の周りに研修制度を受けていた同じ年代の、いわば同期の漁業者がいたことは、多くの面で大変心強いものがあった。また、時には親方以外の先輩漁業者から指導を受ける機会も頂き、親方とはまた異なった技術、漁法を目にすることができた。このような体験ができるのも、地域の漁業者の皆さんが新人を積極的に受け入れてくれる配慮があったからだと思っている。

私は漁業者になってまだ2年目で、まだまだ周囲の方に教わることが多い若輩者であるが、今の自分にできることとして、自分の後に続いてくれる漁業者が現れてほしいと思い、私の事例を発表することとした。私の事例を参考に漁業をやってみたいと思う方が1人でも現れてくれれば、私の支えにもなりとてもうれしい。

## 6. 今後の課題や計画と問題点

南部地区は秋田県の中では若い漁業者が多い地区ではあるものの、依然として漁業者の高齢化や減少に悩んでいる事実には変わりはない。また、昔の自分もそうであったが、若い人や外部の人が「ここで」漁業をやってみたいと思うようになるには、その地区で安定した漁業経営ができそうだ、と思える環境があることが前提だと思う。

今の自分にできることは、まず、先輩方と共に新人が入りやすい雰囲気づくりに協力することが大切だと思っているが、将来は自分も、獲った魚をいかにお金に換えるかを、自らの頭で考えていけるようにならなくてはならないと思っている。